



樋野先生が敬愛される新渡戸稲造の言葉『to do の前に to be を考えよ』は戦後最初の東大総長南原繁も最大の教えと仰っていますが、私の心にも響く言葉です。

スイスジュネーブにある宇宙や素粒子の先端研究所 CERN を訪れた際、壁一面に「我々は何であり、どこから来て、どこへ行くか」と各言語で存在への問いかけがあり、驚き、感動しました。私が学問や研究に携わる動機と同じだったからです。

ヒトは 137 億年前の宇宙の始まり／ビッグバンで生じた素粒子からなる宇宙の塵の塊で、また、ヒトは 1 受精卵から発生し、種々の細胞へと分化しつつ単に細胞の塊にならず形を持ち、感情や理性を持つ個体となります。そんなヒト生物である私達の存在は奇跡的で驚くべきです。しかし、自分が偶然で無意味な存在か、それとも祝福され意義ある存在か、が根源的問題であり、その意味で、「to do の前に to be」は「How to live」の前に「Why to live」と私には響くのです。

普段は意識しなくても、難病や大きな災難と遭遇するとその問いが頭をもたげるように思います。私達が作る物の存在意義や目的は明確ですが、自分の存在意義や目的を自ら求めても、その妥当性の検証は自分の中で循環し不可能です。脳が単に生命の制御機能のみであれば、私達は淡々と生死を受け入れられるのですが、脳は知性のみならず同時に不安感をももたらします。従って、その不安を払拭すべく余儀なく生死や存在の意義を自ら模索し苦しむ「死に至る病 (キルケゴール)」に陥りがちではないでしょうか。

その苦しみの癒しにはそれを理解し受け入れてくれる何かが必要であり、それ無しに如何に立派な教訓的言葉が並べられても虚しく響くのみと感ずります。がん哲学外来の取り組みは、「to be」=「Why to live」という根源的問題と同伴し、「to do」=「How to live」に対し前向きに取り組むべく、言葉の処方箋を模索する試みと捉えています。その様な働きは、たとえ根源的悩みの解決に至らずとも解消する助けとなり、医療の隙間を埋めるのみならず、さらに諸問題を抱える現代社会に必要なことと思います。



定価：本体1,300円＋税
ISBN 978-4-904570-62-3
C0095 ￥1300E
©M オフィスエム



人生の役割

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

横山 郁子

子供の頃の夢は、「いいお母さんになること」でした。それが当たり前で叶うと思っていたのですが、世の中そう思う様には行かず、気がつけば40代になっていました。「自分は世の中の役に立っているのか」と悩み、自分の存在意義を見出せず苦しんでいた時に出会ったのが、「がん哲学外来」でした。

本学の沼田教授から「一緒にがん哲学外来をやってみませんか」と言われた時は、みなさんと同じく「がん？で、哲学?!」と思いましたが、これが人生の大きな転機であったと思います。

本学のメディカル・カフェは学生が主体となって運営をしています。

カフェを始めた頃、お母様ががんで緩和病棟に入られた学生がいました。参加された患者さんの中には、彼の姿を息子さんに重ねて「息子はこんな風を感じているのかしら」とおっしゃる方もたくさんおられ、一方彼も「お母さんはこう思っているのかな」と感じ、毎回いろんな方に「ありがとう」とハグをさせていただき涙していました。

しばらくしてお母様は亡くなりましたが、彼が「母とはたくさん話をして、ありがとうもたくさん言ってみて見送ることができました。メディカル・カフェでたくさんの方とお話しできたおかげです」とスッキリした顔をしていたのを今でも忘れることはできません。

大学にいますと毎年新しいゼミ生が入ってきて卒業していく・・・その繰り返しです。その2年間、どなたかの大切な子供さんの人生に少しでも関わらせていただくことが幸せだと思う様になりました。

自分の子供では叶わなかった子育てを異なった形で叶えることが出来、これが私の役割だったのかと今は思っています。来年、本学のメディカル・カフェは7周年を迎えます。

コロナ禍で現在は zoom で開催していますが、現地開催の再開を望むとともに、「zoom 開催も続けてください」との声も頂いていますので、ハイブリッド開催を準備しています。

皆様に再会できる日が1日でも早く来ることを願って・・・。